



特100  
432



始





# 資本金五拾萬圓

普通及貯蓄銀行業

## 報德貯金

## 勸讓預金

報德の旨  
義を體し  
道徳と經  
濟との調  
和を圖ら  
んが爲め  
最も懇切  
に取扱ひ  
可申候

取締役頭取 兒島八二郎

常務取締役 木村授彌太

東京市京橋區木挽橋際

# 株式會社 報德銀行

電話新橋 六四九番  
振替口座東京 二一〇〇七番

大阪市東區高麗橋四丁目

名古屋市中區五丁目

宇治山田市浦口町

茨城縣水海道町

大阪支店(電話本局四一三番)

名古屋支店(電話三二九〇番)

山田支店(電話三一五〇番)

水海道支店(電話三五〇番)

代理店は横濱、金澤、神戸、廣島其他全國樞要の地にあり



432

大正三年諸節一覽

陽曆	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
陰曆	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子
節日	元始祭 一月一日	春分祭 二月二十一日	夏至祭 五月二十一日	秋分祭 八月二十三日	冬至祭 十一月二十二日	立春祭 二月十三日	立夏祭 五月十三日	立秋祭 八月十三日	立冬祭 十一月十三日	春分祭 二月十三日	夏至祭 五月十三日	秋分祭 八月十三日
神武天皇即位紀元二千五百七十四年	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	甲子	乙丑
西曆一千九百十四年	一月十八日	二月十七日	三月十七日	四月十六日	五月十六日	六月十五日	七月十五日	八月十四日	九月十四日	十月十三日	十一月十三日	十二月十二日

お寶晰目次

○雫の水

- 一、徳のあるお爺様
- 二、大工の熱心
- 三、親切な教訓

○金壹圓

- 一、壹圓のお寶
- 二、殖える力
- 三、眼に見る法

○かねの力

- 一、お金儲け
- 二、三助より金主
- 三、金を産ませる

大正 3. 1. 13  
(1) 内交



○お寶の初穂……………(二四)

- 一、貯金せぬ口實
- 二、餘らぬが金
- 三、初穂から取れ
- 四、きつと出来る
- 五、足らせる道

お寶噺

○事の水

一、徳のあるお爺様

ある處に二宮尊徳様をみたやうな立派なるお爺様が有りました。極く貧乏の家に生れたのでありますが若い時分からたいへん心掛けが良くつて、それに能く働らいて孫の出来た頃には、お寶は溜つたし徳望は有るし、また親切で



あるから、近處の者等はいき神様だと評判して、みんな慕うて居りました。

又その家へお出入する一人の大工がありました。が、いつもお爺様が福々しい顔を爲て、孫ごもを相手に楽しさうに暮らして居らるゝ姿をみて、羨ましく思ひ、自分も何とかして彼のやうに爲りたいものだと考へて居りました。いろいろと思案をこらした末に、それには一つお爺様にお願ひして、やりかたを教へて貰ふのが、はや道であらうと氣が付きました。或る日のこと、お爺様の暇さうな折を伺ひ……お

( 2 )

爺様私は何うぞして、あなた様のやうに立派な方に爲つてみたいと思つて居りますが、あなたは何うして、そんなにお成りですか。何か良い方法があつたら、是非教へて頂きたい……と頼みました。

ところがお爺様は親切な笑顔で、

「それはよい處に氣がつかしました。お前さんは正直ゆゑ、教へてあげるから、明朝はやく五時迄に家へお出で、」この事でありました。

( 3 )



## 二、大工の熱心

そこで大工は大に喜んで其の夜はろくろ寝ずと早起きして、お爺様の家へ行きますと、お爺様はちやんと起きて待つて居られる。何を思はれたか四斗樽の底を抜いて、それを井戸端へ持つて来て、大工を呼ばれ、

「大工さん、昨日約束をした事は教へてあげるが、一つ家の用事を手傳つて貰ひたい。それには之へ水を一杯汲んでお呉れ」





と云はれました。大工はへんな事とは思ひながら、命ぜられた通りに水を汲みましたが、樽に底が無いから、みな流れて少しも溜まりません。夕方になると、お爺様は出て来られて、

「ご苦勞であつた。今日はさぞ疲れましたらう、明朝教へるから、又五時までに来てお呉れ、」  
この事でありました。

大工はおとなしく、翌くる朝も五時に参ります。今度はお爺様は、樽は底もついて完全であります。が釣瓶の方の底

( 6 )

を抜いて、

「今朝はこれでもう一杯水を汲んでお呉れ、約束の事は後で教へる」

と言ひつけられました。

大工はこれも困つた用事とは考へましたが、外ならぬお爺様の頼みなので、釣るしては下げ、下げては上げて、熱心に汲んで居りました。

( 7 )

が、ら／＼びちやんと、釣瓶はしきりに活動して居りますが、もと底が無いから、少しも汲めず、ただほんの雫がほつり



ほつりと樽に落つるのみでした。大工は昨日のやうに無駄な事だらうとおもひつゝも、傍目もふらず汲んで居りましたが暫くして樽の底を見ますと、二三寸溜つて居るではありませんか。

これは面白い、と勇氣を出して一生懸命に汲んだ所が驚くではありませんか。ほつりくゝの雫が、さうくお晝過ぎには樽に一杯に爲つて來ました。

### 三、親切な教訓

それで大工は大悦びで、お爺様の處へ飛んで行き……是れであなたのやうに、爲られる道を教へて下さい……と頼みました。

お爺様は大工を連れて、又のこゝと井戸端へやつて來られて。

「これ、大工さん。誠に御苦勞であつた。お前さんは未だ氣が付かなかつたかも知らぬが、約束した事は昨日半分で、今日半分で、是れで皆教へてあげたのです。昨日から水を汲んで貰つた事を能く考へて御覽。きのふはいくら汲ん





でも底が無ければ、少しも溜らなかつたでせう。今日はほんの雫でも、底があれば溜つて、一杯と爲つたではありませんか。

「お爺様は心から、しみじみするやうな言葉つきで更に、  
「世間の事も此の通りであつて、いくらお寶を儲けても、使つて了へば底無しの樽と同様で、駄目であります。たとひ儲けは僅かでも、締め括りを確かにすれば必ず溜まる。おれのやうに爲る道は外には無い。ゆめ此の事を忘れては成りませんぞ」



と申されました。

大工は成る程と感心しまして、それから、このお爺様の教へを堅く守り、金も溜つて立派な人間と爲りましたさうです。(完)

書物を読む法 机の前で長まつて読むには限らぬ、寝ながらでも道を歩きながらでもかまはぬ、田圃に出て稼ぐ隙でも宜しい自分の氣の向いた時に読むのが、一番覚えがよいと思ふ。

## ○金壹圓

### 一、壹圓のお寶

僅か壹圓の金と云へば、誰もさまで之を大切に爲ませぬ。壹圓では帽子でも下駄でもろくな物は買へない。はくにも穿けず、かぶるにも冠れず、これ位な端た錢何うするものかと云つて、かるくしく遣ひはたす人がありますが、それは誠に愚な事であります。

今こゝに壹圓の金を稼ぎ出して、それを自分の懐ろから



別にして、銀行へ預けて置いたら、貯金となつて次第に利子を生んで殖えて行きます。

## 二、殖える力

それで其の殖え方は大したものであります。壹圓の金が年六分の利子が付くとして、五十年経つと元利金拾八圓四拾貳錢となり、それが百年に至ると、参百参拾九圓参拾錢と爲つて、殆ど参百四拾倍となります。更に年壹割に廻るとして、計算したならば、五十年目に百拾七圓参拾九錢とな

り、百年目には實に壹萬参千七百八拾圓四拾壹錢となることは驚いたものでは有りませんか。

されば壹圓のお寶は僅かなものであると云つて、輕々しく使つては成りますまい。

## 三、眼に見る法

斯のやうに、金は元來殖える力を持つて居りますが、費へば又いくらでも、すぐ無くなる性質をも備へて居ります。その殖える力を眼の前に見やうと思はゞ、まづ良い銀行に



貯金を爲て置かねば成りませぬ。それさへ怠らねば、壹圓の金でも何萬圓と云ふ大きなものゝ爲つて、富士の高嶺を見るやうに、貯金が大きく美しく、楽しく見えるやうになるのであります。

(完)

心だに誠の道にかなひなば

祈らずとも神や守らむ

## ○金のか

### 一、お金儲け

かれこれ二十年ほど前に、田舎から一文無しで、東京に出た人が、今では参拾萬圓からの身代になつて居ります。あの日の事です、その人を訪うて……あなたは無一文から此の身代を作られたと云ふことですが、實に敬服の至りです。然し、これには何か金儲けの秘訣があります。何うぞ教へて貰ひ度です……と尋ねますと、その人の話に曰く、





「別に秘訣と云ふ事はありません。併し私是一个の信仰を持つて居ります。それは金を作るには必ず手傳が要る、自分獨りでは作れるものでないこと云ふ事です。」

そこで……いや、それ位な話なら私でも知つて居ります。無一物から金を作るには、何うせ善い友達でも有つて、親切に世話して呉れねば、一人で出来やう筈が有りますまい……と言へば、

ところが然うではありません。君等はすぐ人に依頼しますだから可くませぬ。私の云ふ手傳とは人では無く、



金です。金が手傳つて呉れ、金が金を儲けて呉れねば決して大きく出来るものではない」

「斯うなること恥を言はねば解りませんが、私は君等の知つてゐる通りに、田舎から全く無一文で出た男です。東京に来ると何も分らず、他の仕事も知らぬので、先づ湯屋の三助に爲り、浴客の脊中を流して金を貰つて居りました。併し流しで取つた金だけは一文でも使はずに、みんな主人に預けました。主人はそれに利息を付けて殖やして呉れたのです。」

## 二、三助より金主

「その間に金はだん／＼と溜まりましたして、溜まればたまる程面白くなります。酒は飲まず、葷も喫はず、夜遊びなどは素より爲ませぬ。毎日働らいては儲け、儲けては溜めて、参年ほど辛抱しますと妙なものです。表向きはやはり三助でした。が、内所では主人の金主と爲りまして、私の貯金が、この營業資本と云ふ始末です。さて斯うなること誠に有り難いもので、私が流しで取る金よりも預けた金の利息の方



が多くなつて金はずん／＼と殖えるばかりです。」

### 三、金を産ませる

「そこで私は悟りました。なるほど一人で儲くるだけでは高の知れたものである。儲けた金を貯蓄して金に金を産ませなければ大きな身代は出来ない。云ふ事が解りました。夫れから後は何を爲るにも皆此の筆法で行つて来たから、未だ財産と云ふほどの財産は有りませぬが金の力で先づ是れ迄は漕ぎつけました。」

と聞いて見れば、流石は成功する人の實驗談であります。よく味ふと、なか／＼有益な所があります。儲けた金を手傳にして金を儲けさせ、金の力で金持ちに爲ると云ふ、此處が即ち貯金の妙味であります。金儲けの秘訣は全くこの外に有りませぬ。(完)

家康の遺訓 不自由を常と思へば、不足は無  
い、心に望み起らば困窮したる時を思ひ出せ  
よ。



○お寶の初穂

一、貯金せぬ口實

「なるほど貯金は結構です。貯金を爲ればお金が溜り貯金者は金持ちになる。それはもう百も承知して居ります。が肝心の金が有りませぬ。無い袖は振れぬとか云ふ。われ／＼が貯金をせぬのは貯金が嫌ひで爲ぬのでは無く、實は貯金にする金が無いから爲たくても出来ぬのであります。金さへ有れば貯金は何時からでも爲ようと思ふ」

( 24 )

と。これが世間の人の貯金を爲ない口實であります。そこで又問うて見ました。「そんならお金は少しも儲けないですか」

「いや儲ける事は儲けて居ります。車夫は走つて儲け商人は賣つて儲け、百姓は作つて儲け、皆それ／＼に儲けては居ります。併し儲けた金はみな食つてしまふ、飲んでしまふ着てしまふ。迎も／＼溜める金など餘りは爲ませぬ。餘つたら溜めもしませうが日々の暮らしに追はれて、かつかつといふ始末では貯金どころの騒ぎではありません」

( 25 )



と。成るほご能く解りました。貯金の出来ない原因は茲に在ります。餘つたら溜めやうと云ふ。この餘つたらといふ「たら」の字が何よりの毒であります。貧乏神は此處から來ます。

## 二、餘らぬが金

抑も金と云ふものは餘るものでありません。いくら有つても足りないのが金の性質です。然るにその餘らぬ金が餘つたら溜めやうと云ふ。實にこれほご無理な注文は

ありません。さういふ無理を云つてるうちは生涯待つても貯金は出来ません。

ほんとうに貯金を爲ようと思ふなら、餘るまで待つのはなく、兎も角も儲けた金の初穂から積むのです。飲み食ひをした後で、餘りが有つたら、積まうではなく、何でも金を手を取つたら、先づ一番に貯金に入れる。入れた残りで飲み食ひをする。これが本統であつて、かうさへすれば貯金は出來ます。餘り金は天下にありませんが、初穂の金なら何處にでも有ります。



### 三、初穂から取れ

いくら貧乏な月給取りでも月給日には必ず金が有る。一夜越したらもう駄目です。月給を使ひ始めると限りは無い、おれに要りこれに要り有るだけは皆要つて了つて足りなくなる。

それですから月給取りには月給日が即ち貯金日です。月給を貰へば先づ一番に貯金を引去り、あとの残りで暮らしを立てる。百姓ならば初穂刷りの日に貯蓄米を先きに取

りあこを正味の收穫にする。商人ならば勘定日に純益の初穂から積む。稼人ならば先づ賃錢の初穂を銀行へ預け、残りの金を女房に渡します。これが即ちお初穂貯金で、かういふ風に行りさへすれば、どんな人でも貯金は出来ます。

### 四、きつと出来る

併し又或者は斯う言つて居る。

「初穂から引き去つたなら貯金は出来ても暮らしが立つまい。吾々の金は皆使つても足りない位なのに、それを初



から貯金にすれば、あさは益々足りなくなつて、暮らす事が出来なく爲らう」と、それが又大きな間違ひであります。人の暮らしは護謨と同じやうで、延せば一尺にもなるが縮むれば又一寸にも収まります。拾圓でも暮らし、九圓でも暮らす。拾圓で暮せる人なれば、九圓でも確かに暮らせる。若し九圓で暮せぬといふ人ならば、拾圓有つても其の人は暮らせません。全體、足ると足らぬとは金に無くて、心に有ります。これより外には、もう一厘も無いと諦めが付きさへすれば、それで暮らしは結構に立つのであります。

( 30 )

## 五、足らせる道

或人の歌に、

事たれば足るに任せて事たらず

足らで事たる身こそ安けれ

有ると思つて使へば、いくら有つても足りない。無いと諦めて費はねば、少しにても餘る。人間は今は達者で儲けて居るからと云つて油断は出来ませぬ。いつ何時病氣で働けぬ時が有るかも知れぬ。又子孫の事も考へて行らね

( 31 )



ばなりません。

されば二宮尊徳先生は有り難き報徳の教を説いて、そのうち一番大切なのは譲りの道である。儲けたものは自分のものであれど、その儲けた事が、一つは先祖のお蔭、又一つは世間のお蔭であるから、儲けた一部は自分の物で無いこと思つて子孫の爲めや、社會の爲めに譲らなければ成らぬ。それが人の道である。斯う教へられました。

何にしる貯金は初穂から取つて暮らしは後の残りです。足らせるのが肝要で有ります。(完)





實を得る極意 人の休む所もよく働き、人の使ふべき所をも冗費として省くとか、兎にかく他人より多く勤むるほど、實は多く舞ひ込むのであります。それから實は金のみではない、身體の強健なものも實であり、人望の集るのも實であり、徳行の進むのも實であります。つまり實を得る極意を言へば自分の我儘を直して、皆の爲に能く働くといふ事でありませう。

大正三年五月廿七日印刷  
大正三年五月廿七日發行

著 者 坪 井 忍  
東京市京橋區東豊玉河岸二十號地

發 行 者 實 會  
東京市京橋區東豊玉河岸二十號地

印 刷 者 高 橋 季 吉  
東京市小石川區久堅町百八番地

印 刷 所 博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百八番地



276
90



終

德